

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01595

研究課題名（和文）児童福祉施設における青少年支援の再検討 - 遊び・スポーツ等を通じた支援を中心に -

研究課題名（英文）Reexamination of Youth Support Programs at Child Welfare Facilities in Japan - Using Play and Sports

研究代表者

岩田 美香（Iwata, Mika）

法政大学・現代福祉学部・教授

研究者番号：30305924

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、児童福祉施設における青少年支援、なかでもレクリエーション活動やスポーツを通じた支援の検討を行うものである。

全国の児童福祉施設に対して、施設におけるレクリエーションに関するアンケート調査を実施した。支援の実態だけでなく、支援を企画する際の支援者の意図や子どもへの影響についても調査し、施設種別・種別横断的に分析を行った。

海外の研究者と実践者（Anderson-Butcher教授とLiFE sportsのスタッフ）の協力を得て、児童福祉施設の職員が、自らの施設での実践を科学的に検討・開発していくワークショップを実施し、その成果を各施設のニーズに応じた実践へと展開させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

児童福祉施設では「自立」に向けた支援に重きが置かれ、子どもたちの進路に関わる学びや就労についての研究は蓄積されているが、レクリエーションなどの遊びに関する支援については、科学的根拠に基づいて支援が提供されているとは言い難い。しかし子どもの権利条約第31条にもあるように、遊びは子どもたちの健康とウェルビーイングにとって大切であり、本研究は施設における子どもたちへの支援の質を高めていく上での一助となる。施設における児童生活支援員、児童自立支援専門員、少年指導員といった職員の専門性を高めるとともに、地域における学童保育や児童館などにおける青少年支援の専門性を高めることにも応用することができる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine support for youth in child welfare facilities, particularly through recreational activities and sports.

(1) We conducted a questionnaire survey of child welfare facilities nationwide regarding recreational activities at the facilities. We conducted a cross-sectional analysis by type of facility, investigating not only the actual state of support, but also the intentions of supporters when planning support, and the impact of support on the children.

(2) With the cooperation of overseas researchers and practitioners (Professor Anderson-Butcher and LiFE sports staff), workshops were held for staff members of child welfare facilities to examine and develop practices at their own facilities. The results of the workshop were developed into practices that meet the needs of each facility.

研究分野：社会福祉

キーワード：青少年支援 児童福祉施設 レクリエーション スポーツ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 児童福祉施設の入所児童の特徴

毎年の児童虐待件数の増加にみられるように、保護者の適切な養育を受けられない子どもたちが増加し、社会的養護の対象児童も増加している。本研究では、こうした社会的養護の受け皿となっている児童福祉施設のなかから、児童養護施設、児童自立支援施設、母子生活支援施設を対象とする。入所児童の特性としては複雑な生育環境を背負っている児童が多く、近年では被虐待傾向の割合が高くなってきており、児童養護施設(59.5%)、児童自立支援施設(58.5%)、母子生活支援施設(50.1%)が虐待を経験し(厚生労働省 2013)、その背景にある貧困の問題も指摘されてきている(松本 2010、西田他 2011)。さらに児童の心身等の状況についても、児童養護施設(28.5%)、児童自立支援施設(46.7%)、母子生活支援施設(17.6%)の入所児童に何らかの障害があり(厚生労働省 2013)、こうした児童への対応も難しくなっている。

#### (2) 児童福祉施設での支援

社会的養護全体の基本的方向としては「家庭的養護の推進」があげられ、里親委託を推進するとともに、施設における養育単位の小規模化、自立支援の充実、親子関係の再構築などを進めるとしている。個々の施設における具体的な支援としては、心理的ケアも含めた生活支援の充実や対応が難しい児童への支援方法の検討、また社会的自立を迫られる彼らの現実に向けた学習や進学・就労支援に重きが置かれている。本研究者たちも「家庭的養育」における「家庭的」とは何を指すのか、家庭的支援の内実を検討する研究を行ってきた。そこでも日々の生活を中心に学習や行事に関して考察を行ったが、遊びやスポーツやレクリエーションそれ自体のプログラムの中味について検討するまでには至らなかった(岩田 2015・2016)。

### 2. 研究の目的

本研究は児童福祉施設における青少年への支援、なかでも青少年の課題も踏まえた遊びやスポーツ、レクリエーションなどを通じた支援の再検討を行うことを目的としている。児童福祉施設における支援は、「自立」に向けた生活を中心に、学習や進路に重きがおかれ、その支援検討も積み上げられてはきている。しかし日々の遊びやスポーツ、また行事として行われるレクリエーション活動に関しては、安全面の配慮はされていても、その内容について科学的な根拠に基づいた活動が提供されているとは言い難い。児童福祉施設での実態を明らかにするためのアンケート調査と、児童福祉施設職員が参加して自らの実践を科学的に検討・開発していくワークショップの実施を通して本研究の目的を達成する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 全国児童福祉施設調査

全国の児童福祉施設に対して、現在行っている支援の実態を明らかにするためのアンケート調査を実施した。児童養護施設(615施設)、児童自立支援施設(58施設)、母子生活支援施設(232施設)に対し、アンケート用紙を郵送にて配布・回収した。調査時期は2021年3月中旬～5月上旬であり、回収数および回収率は、児童養護施設243施設(40.7%)、児童自立支援施設41施設(69.5%)、母子生活支援施設131施設(61.8%)である。調査内容は、「施設と回答者について」「施設で実施している年間行事について」「施設で実施している遊びやレクリエーション活動について」「施設におけるユニークな遊びやレクリエーションについて」「遊びやレクリエーションに関するコロナ禍の影響」「子どものネットやゲームの利用について」である。

#### (2) 児童福祉施設職員と研究者およびLiFEsportsスタッフによるワークショップ

アメリカオハイオ州立大学において貧困家庭等への予防的プログラムを提供しているLiFEsports ([www.osulifesports.org](http://www.osulifesports.org))のディレクターであり、ソーシャルワーク学部教授のDawn Anderson-Butcher氏の協力も得て、2022年9月21日～23日に実施した。児童養護施設職員、児童自立支援職員、母子生活支援施設職員、研究者を含め23名が参加した。

### 4. 研究成果

#### (1) アンケート調査結果

##### 年間行事

全般的に、季節ごとに複数の行事を行っており、積極的に行事活動に取り組んでいた。なかでも児童養護施設と児童自立支援施設では、施設全体での実施状況とユニットや寮における実施状況に違いが見られ、今後、施設がより小規模化していくなかで、どの施設行事はどの単位で行われるのか、といった動向を見ていく必要がある。

##### 活動企画への子どもの参画

活動の企画に子ども自身が参画している割合は、児童養護施設では6～7割半程度と他の施設よりも高い傾向にあり、とくに<外出や旅行>に関するレク企画への参画は76.3%と高い。児童自立支援施設では、<遊び・その他>の活動に関しては75.0%と高い参画傾向にあるものの、他のレク活動においては3施設種別の中で最も低い。

活動への参加について、「自由参加」が母子生活支援施設9割、児童養護施設7割程度に比べて、児童自立支援施設では「強制参加」が9割弱となっており、活動への自由度は低い傾向にある。

#### 活動の実施理由と目的

レク活動を実施する理由について、全般的に「子どもの成長・発達のため」と「子どもの心のケアのため」が多かった。活動内容の分析では、3施設種別ともに<スポーツや運動>と<外出や旅行>の活動において「子どもの成長・発達」を期待して実施していた。一方、「心のケア」を意図して実施しているものとしては、児童養護施設では<外出や旅行>と<遊び・その他>の活動であり、児童自立支援施設では<食に関する活動>と<遊び・その他>があげられていた。母子生活支援施設については、全般的に「子どもの心のケア」のためにレク活動を実施している割合は低く、いずれの活動においても5割を下回っていた。

活動の目的として尋ねた場合、「楽しみのため」とする回答は、いずれの活動内容の場合でも最も高く、レクリエーション活動の主要な目的となっている。子どもたちに「多様な経験」をさせるといった目的も、どの施設種別においても、どの活動分野においても比較的高い割合を占めていた。とくに<外出や旅行>活動や<食に関する活動>において、その割合が高い。レクリエーション活動における多様な経験を通して、実施理由の上位に示されていた「子どもの成長・発達」を促すことができるのであろう。

#### ネットやゲーム利用

子どもたちが、インターネットや電子ゲームを児童福祉施設で行う機会は、児童養護施設では86.0%、児童自立支援施設では14.6%、母子生活支援施設では41.3%とばらつきがあるが、ネット依存・ゲーム依存と思われる子どもは、施設種別を問わず5～6割弱であり、支援におけるネットやゲームの存在は見過ごせるものではない。

実際、ネットやゲームが施設のレク活動に与える影響をみると、児童養護施設では、「行事への参加意欲への減衰・拒否」「生活リズムへの悪影響」「対人コミュニケーション能力への影響」があげられ、児童自立支援施設では、「外でのレクリエーション活動への不参加」「有害な情報に接触するリスク」を懸念していた。母子生活支援施設においても、「行事への参加意欲の問題・不参加」や「コミュニケーションの低下」そして「子どもの育ちへの懸念」が記されていた。

#### レクリエーション活動において大切にしていること

遊びやレクリエーションを企画する際に大切にしていることとしては、児童養護施設では「子どもが楽しむこと」「子どもの主体的参加」そして「子どもたちの成長」があげられ、同時にレクを実施するに際しての「様々な配慮」も述べられていた。児童養護施設が地域分散化・小規模化していることに伴い、レクを行う単位など「施設の動向とレクの運営」についての意見もみられた。児童自立支援施設でも、「子どもたちが楽しむこと」が第一であり、それが「子どもの成長」にも通じると考えている。そのためには「子どもと一緒に職員も楽しむこと」が重要であり、これらを実現していくために、子どもの特性も含めた「様々な配慮」をしていた。母子生活支援施設では母親と子どもと一緒に生活している施設であるため、「子どもが楽しむ」「主体的参加」「子どもの成長」といった子どもについての記載だけではなく、「母親への対応や配慮」についての意見も出されていた。

さらに今後、遊びやレクリエーション活動を充実させるために必要なこととしては、「職員の質の向上」「職員配置」や「予算・施設の充実」については3施設種別を通して意見が出されていた。加えて、児童養護施設ではレクの充実のためにも「日常生活が重要」であることや、「集団と個を考える活動」、施設レクとしての「インターネットやゲーム」についての意見も出ていた。児童自立支援施設では、より枠のある「児童自立支援施設という施設の特性とレク」についての意見や、母子生活支援施設ではレクにおいても「地域との交流が必要」といったユニークな意見も出ていた。

#### 【報告書】

- ・岩田美香 編(2022)『施設における子どもの遊びやレクリエーションに関する調査<コロナ禍での影響に関する項目> 報告書』
- ・岩田美香 編(2023)『施設における子どもの遊びやレクリエーションに関する調査 報告書』

#### (2)ワークショップでの成果

##### ワークショップの内容

1日目は、参加者どうしのアイスブレイクの後、Anderson-Butcher 教授による「LiFEsports について：コンセプトと成果」の講義と、参加者の各施設の支援におけるレクリエーションやスポーツの活用について意見交換を行った。2日目は、Anderson-Butcher 教授による「LiFEsports のケーススタディ：個人に焦点をあてて」の講義とプログラム作成におけるロジックモデルの応用についての教授を受け、「子ども（個人）に焦点をあてたニーズの把握と支援」を考えるグループワークを実施した。3日目は、Anderson-Butcher 教授による「LiFEsports のケーススタディ

引き続き「集団に焦点をあてて」の講義と「グループに焦点をあてたニーズの把握と支援」を考えるグループワークを実施した。最後に参加施設ごとに、これまでの学びを踏まえた支援プログラムについてのプレゼンを行い、参加者や Anderson-Butcher 教授からのコメントを受けて、お互いの支援策についてシェアした。3日間を通して、必要に応じてチャートワークを実施し、子どもたちの課題や特性に応じたグループワークについての実践的な演習を行った。

#### フォローアップ研修

参加者した施設職員は、ワークショップでの成果を各施設に持ち帰り、自らの施設において実践した結果と考察について 4 か月後にメールにて報告をした。それらの成果と課題については Anderson-Butcher 教授とも意見交換を行った。

#### 施設職員の気づき（参加者の感想から）

参加者の以下の感想にあるように、支援としてのスポーツやレクリエーションの活用について再考するとともに、子どもたちのアセスメントに基づいた支援やグループダイナミクスを用いた支援を実践的に習得する機会となった。

- ・スポーツは勝敗が付いて回るものであり、支援者も「いかに勝たせるか」ということを考え、勝たせるための指導や働きかけをしがちとなっていた。目的が勝敗となり、本来の支援が置き去りになっていたと気づかされた。
- ・スポーツやレクリエーション活動を目的ではなく、支援の手段として活用することの意義を理解すると同時に、それはロジックモデルを応用した、子どもたちのリスク要因や保護要因を十分に検討・把握し課題の設定を的確に把握することで、その支援効果が大きくなるという事を実感した。
- ・LiFEsports が設定しているような、(SETS: Self-control, Effort, Teamwork, Social responsibility) といった支援目標を立て、その観点から、子どもたちの長所を評価し伸ばしていくことによって、集団としての成長と子ども一人ひとりの成長発達が促されると思った。これはスポーツの場面だけではなく、生活や遊びの中など様々な場面で意図的に取り入れることができるものである。
- ・スポーツやゲーム、レクリエーションにおける、意図的な子どもたちへの働きかけを体験できた。
- ・グループワークを体験し、グループの力を再認識した。集団活動や遊びを通じて互いに認め合う体験は、子どもたちの心身の安定に必要な不可欠な要素である。
- ・スポーツやレクリエーション活動であっても、ソーシャルワーカーとしてニーズを把握すること、リスクやストレスをアセスメントすることの大切さを再認識した。

#### < 引用文献 >

- ・松本伊智朗 編(2010)『子ども虐待と貧困 「忘れられた子ども」のいない社会をめざして』明石書店
- ・西田・妻木・長瀬・内田(2011)『児童養護施設と社会的排除 - 家族依存社会の臨界 -』解放出版社
- ・岩田美香 編(2015・2016)『社会的養護における「家庭的」支援の検討 - 児童自立支援施設からの考察 -』調査報告書

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>新藤こずえ                                   | 4. 巻<br>138           |
| 2. 論文標題<br>児童養護施設で暮らす障害のある子どもの進路と支援               | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>北海道大学大学院教育学研究院紀要                        | 6. 最初と最後の頁<br>119-136 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14943/b.edu.138.119 | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）             | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>新藤こずえ                            | 4. 巻<br>44          |
| 2. 論文標題<br>児童養護施設における貧困経験のある子どもの非認知的スキルと支援 | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>上智社会福祉研究                         | 6. 最初と最後の頁<br>17-40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし              | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）      | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>岩田美香                                      |
| 2. 発表標題<br>社会的養護実践における家庭的・家庭支援を考える 全国児童自立支援施設調査を通してー |
| 3. 学会等名<br>児童養護実践学会（招待講演）                            |
| 4. 発表年<br>2022年                                      |

〔図書〕 計3件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>岩田美香（松本伊智朗、小西祐馬、川田学 編）        | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>明石書店                          | 5. 総ページ数<br>352 |
| 3. 書名<br>シリーズ子どもの貧困「遊び・育ち・経験 子どもの世界を守る」 |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>岩田美香、高良麻子                                      | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>生活書院   | 5. 総ページ数<br>160 |
| 3. 書名<br>いじめ・虐待・貧困から子どもたちを守るためのQ&A100 スクールソーシャルワーカーの実践から |                 |

|                                    |                 |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>垣内国光、岩田美香、板倉香子、新藤こずえ     | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>生活書院                     | 5. 総ページ数<br>304 |
| 3. 書名<br>子ども家庭福祉ー子ども・家族・社会をどうとらえるか |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

|  |
|--|
| <p>LiFEsports at The Ohio State University<br/> <a href="https://www.osulifesports.org/">https://www.osulifesports.org/</a></p> <p>【報告書】<br/>         ・岩田美香編（2022）『施設における子どもの遊びやレクリエーションに関する調査&lt;コロナ禍での影響に関する項目&gt; 報告書』<br/>         ・岩田美香編（2023）『施設における子どもの遊びやレクリエーションに関する調査 報告書』</p> |
|--|

| 6. 研究組織           |  |                                    |    |
|-------------------|--|------------------------------------|----|
|                   | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                      | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)              | 備考 |
| 研究<br>分<br>担<br>者 | 相澤 仁<br><br>(Aizawa Masashi)<br><br>(00754889) | 大分大学・福祉健康科学部・教授<br><br><br>(17501) |    |

## 6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                       | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                        | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 野田 正人<br><br>(Noda Masato)<br><br>(10218331)    | 立命館大学・人間科学研究科・教授<br><br><br><br>(34315)      |    |
| 研究分担者 | 栗田 克実<br><br>(Kurita Katumi)<br><br>(30530109)  | 旭川大学・保健福祉学部・教授<br><br><br><br>(30101)        |    |
| 研究分担者 | 福間 麻紀<br><br>(Fukuma Maki)<br><br>(70581867)    | 北海道医療大学・看護福祉学部・准教授<br><br><br><br>(30110)    |    |
| 研究分担者 | 板倉 香子<br><br>(Itakura Kouko)<br><br>(30739181)  | 洗足こども短期大学・幼児教育保育科・准教授<br><br><br><br>(42709) |    |
| 研究分担者 | 新藤 こずえ<br><br>(Shindou Kozue)<br><br>(90433391) | 上智大学・総合人間科学部・准教授<br><br><br><br>(32621)      |    |

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)      | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|--------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 秦 直樹<br><br>(Hata Naoki)       |                       |    |
| 研究協力者 | 横井 義広<br><br>(Yokoi Yoshihiro) |                       |    |

6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)  | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-------|----------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 熊澤 健<br><br>(Kumazawa Ken) |                       |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関              |  |  |
|---------|----------------------|--|--|
| 米国      | LiFEsports(オハイオ州立大学) |  |  |